ＳＨＵＲＵ～はじめの一歩～

中　三

みなさんは、外国人に道を聞かれた時にどうしますか。外国語が苦手だから……と逃げたり無視したりしていませんか。私は空港や街で外国の方に道を聞かれたら、必ず立ち止まって話を聞きます。わかる時は英語かジェスチャーで答えます。わからなかったら近くにいる人と協力して教えようとします。このように、ふだん日本人に道を聞かれた時と同じような対応をすると、たとえうまく道を説明できなくても、親切にしたいという気持ちは相手に伝わると思います。

こんなふうに私が思うのは、父を通して、日本に住む外国の方の苦労を知っているからです。私の父はイラン人、母は日本人です。だから私も、みんなと顔立ちが少し違います。それにみんなの家とは、少しだけ文化も違います。父は日本に来てから二十年ほど経ちますが、初めて来日してから十年ほどは、街を歩くだけでジロジロ見られたそうです。都会でも田舎でも、ただ歩いたり電車に乗ったりするだけで……。そして仕事でも、言葉が通じないことで差別されたことがあるそうです。うまくしゃべれないのは母国語ではないから当たり前のことなのに、悔しい思いをしたことが何回もあるといいます。

小学校低学年の頃、私も「自分の国に帰れ。」とか、「外人。」とからかわれたことがあります。仲間はずれにされたような、寂しい気持ちになりました。私が、というより父が差別されているように感じて、泣いたこともあります。

こんなふうに、自分と少し違うだけで相手を差別する人や、悪意はなくても道を聞かれて無視する人がいると、日本人の印象が悪くなるし、国際社会では日本人全体が信頼をなくしてしまいます。「どうして一部の日本人は外国人に対して差別するのだろう？」と考えた時に、江戸幕府の鎖国の影響が今でも少し残っているのかな、と思えます。それはまた、自分達より低い身分をつくることによって、生活の不満をそらそうとしている身分制度の名残のようにもみえます。そしてこのままで

は、日本にやってきた観光客や日本に居住している外国人の居場所がどんどんなくなっていき、鎖国のような状態に逆戻りしてしまうと思います。

しかし、そんな中でも私の父は差別に負けずに、日本でたくさんの友人をつくり、母と出会いました。大工をしてコツコツお金を貯めて、今はレストランを経営しています。父の店は食事とともにダンスショーを楽しめて、雑貨も売っています。お客さんはお店のペルシャンな雰囲気を楽しんでくれます。個性的な文化をみんなで楽しむ父の店には爽やかな風が吹いているようで、私も豊かな気持ちになります。

そして私には大きな夢があります。それは、自分の個性と背の高さを生かして、ベリーダンスのダンサーとして活躍することです。五歳でダンスを始め、父の店のショーからスタートして、今は国内の大きなショーに出演させていただき、中国で開催された国際大会で準優勝しました。ダンスという表現を使うと、言葉が通じなくても全世界に思いを伝えられます。また、ＳＮＳを使って国内、国外のダンサーと交流し、友情を深めています。今の私は、父母から受け継いだ二つの文化の良いところを生かして自分の可能性を広げているので、毎日の生活がとても充実しています。

私が二十歳になった頃、東京オリンピックが開催されます。安全で清潔な街として世界的に評価の高い東京、そして日本です。ここに真のおもてなしの心が加わると、外国人にとってだけでなく日本人にとっても、さらに住みやすくなると思います。

肌の色が違う。言語が違う。国ごとに文化も違う……。違うものや違うことはたくさんあるけれど、同じ人間ということに変わりはありません。自分の国とは文化が違うという理由で偏見の目で見て無視や差別をするのではなく、お互いの違いを認め合い、ともに楽しんでいきましょう。

それが、地球全体で人権を守り、争いをなくし、差別をゼロに近づけるためのＳＨＵＲＵ（はじめの一歩）だと思います。